

第 11 回研究発表会の発表要旨

『内的体験としての戦闘』について

大 泉 大

エルンスト・ユンガーは作家としての歩みをはじめるに際して、戦争を自らの表現する舞台として選んだ。この表出の舞台選択は、ユンガーにとって必然的なものであったろう。今回の発表はこの選択がユンガーの執筆、特に 1920 年代における執筆にとって持っている意味とその内実を『内的体験としての戦闘』を分析することで少しでも明らかにすることを目的としている。そのためにまず、近代戦の発端となったナポレオンによって主導された戦争を分析の対象としたヘーゲルの戦争観を参照する。ヘーゲルは近代戦におけるある矛盾を指摘している。その矛盾とは、個人が「勇気」という徳を発揮することで英雄となるのと同時に、その徳の発揮は近代においては個の消滅を同時に意味するという矛盾である。この近代、特に戦争という生の極限状態における矛盾にまっこうから抗ったのがユンガーの初期の著作であるといえる。そのことはユンガーの戦争参加の動機にも求められる。彼は日常という退屈な変化のない時間の流れを断ち切る非日常的な、生が裸のままに乱舞する舞台に憧れ、高校からアフリカの大地へと飛び出す。この試みは失敗に終わるが、こうした心情がユンガーの戦争参加の動機であったことは疑いないだろう。

さて、『内的体験としての戦闘』は 1922 年に出版されたユンガーの第二作であり、戦争についての初のまとまったエッセイでもある。このエッセイにおけるユンガーの主張を要約すれば、戦争を内的に体験したものこそがこの時代において、生を最も原始的にまた根源的に把握しつつ発揮したものであり、この困難な時代に英雄たりうる、というある種の信念ともいえる。つまりこのエッセイは論証的なものではなく、この時代にいかにかに英雄たりうるかを論理的に読み解こうとするのは、誤読へとつながる行為である。むしろ、ユンガーの主張を事の正否にかかわらず一種の症例に似た現象として読み解くことが、現在からユンガーを読む際には賢明な態度といえるだろう。そう考えると、『内的体験としての戦闘』におけるユンガーの主張は、「傭兵」という「戦争を生来のエレメント」とする存在にかんしてもつ揺らぎをもちろん視野に入れて考えねばならないが、近代という個の消滅が宿命付けられた時代に、個人の生がいまだに単独的な存在として輝きうると、主体の側から考察した主張と考えられる。この主張から考えてこそ、ユンガーの文筆の歩み、特にナチスが政権を獲得する以前の執筆活動を一貫したのものとして考えることが出来るのだ。だから、『内的体験としての戦闘』を読むことは、ユンガーの執筆を支える確信・核心を読み、解き明かすことにほかならないのである。